I-29

西澤文隆の空間認識及び設計手法に関する研究
-日本の伝統的建築・庭園の実測調査からの展開-

Research on Fumitaka Nishizawa's survey of traditional architecture and gardens in Japan, his spatial recognition and design approach

○大吉龍成[1], 田所辰之助[2]
*Ryusei Ohyoshi[1], Shinnosuke Tadokoro[2]

Architect Fumitaka Nishizawa is known for the house works such as houses without the front, but the space perception, design technique wants to inspect how it has been formed a change by the actual survey investigation of the Japanese traditional shrines and temples building, garden. Analysis intends for a measured drawing by Nishizawa and is intended to clarify outlook on original building. At first I elucidate the space perception, design technique from writing of Nishizawa. In addition, about the actual survey investigation, I compare the drawn actual survey drawing with the existing drawings such as a Shinto shrine or the temple by Nishizawa oneself

1. 研究背景及び目的・方法

建築家西澤文隆は正面のない家などの住宅作品で知られるが、その空間認識・設計手法が日本の伝統的社寺建築・庭園の実測調査によってどのように変化、形成されてきたかを検証したい。西澤による実測図を分析対象として、その独自の建築観を明らかにすることを目的とする。まず、西澤の著作からその空間認識、設計手法を解明する。また、実測調査については、神社や寺などの既存の図面と、西澤自身によって描かれた実測図面の比較を行う。

2. 西澤文隆による実測調査とその作法

実測は 1958 年～10 月に六義園の実測が一番初めであると考えられている。1967 年 1 月 1 日、本格的に実測活動をはじめた。建築と庭を示した図面はそもそも少なく、建物単体でさえ満足のいく図面はない状態ですべての図面が怪しく見えてきたという。そのため一から実測を行わなければいけなく、実測方法としては平板測量や機械を試みたが、磁石とスケールを使い最も原始的な方法で測量を行っていた。

庭と建築の連なりどころか建築と建築の連なりも表現されていないことに気づき、もう少し大きく敷地全体の中で庭園と建築が互いに入り混じり合っている状況をとらえる必要を感じ自ら測る決心をした。一度実測に出かけるたびに 4～5 万円のお金が飛び、実際経済的に大変な仕事である。しかし、この実測で空間は至るところに学ぶべき空間、ディティールが発見され、身体を動かす事により第三者という事を忘れて物の中に入り込んでいる自分を発見でき、測るというよりもつくっているような気持ちで実測をしていた。長い時間をかけて沈殿していった歴史の重み、人のエネルギーの結晶、環境の中でいかにそれらの庭たちや建築たちが生きているのかを表出しなければいけないが、感じ取ったもの表出させたいものを図面におこし図面を見た人が何かの感銘を受けてくれればいいのである。そして西澤文隆は実測調査で得られた独自の空間認識を作品に生かしていたのであろう。

3. 西澤文隆の空間認識について

西澤文隆の空間認識は大きく分けて 4 つに分類されている。まず 1 つ目に「透けた空間(寝殿造系統)」透けるためには第一に開放的でないといけなくて、開放であれば室内外が等質となる。建築が透けると同様に庭も柔らかく透けてくる。2 つ目に「密な空間(書院造系統)」庭と庭は切り離され寝殿造のように互いに透け合ってはいけなくて、庭の仕切りを通過するごとにまったく異なる庭が展開し、空間にリズムがつけられているのである。3 つ目に「歩く庭(茶室と回遊式庭園)」一景一景まとまった庭の連続にあり、庭の連続の仕方にはストーリーがあり、人間的尺度のなかで閉鎖と開放の抑揚のリズムに乗せられて歩き、融け込んでいくのである。4 つ目に「庭と呼ばれない庭」自然の中に建築が造られた場合自然は庭園化する過程にある。このように西澤文隆は分類したのである。

1：日大理工・学部・建築　2：日大理工・教員・建築

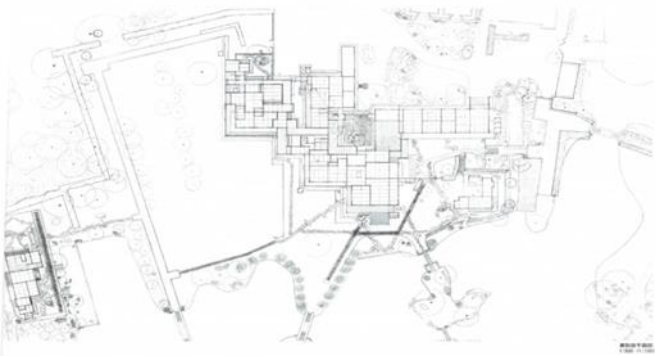

Fig1 桂離宮　書院部平面図(西澤文隆　実測図)

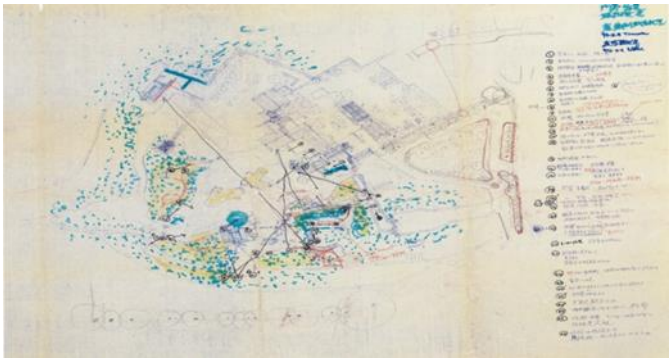

Fig2 桂離宮　配置図　庭遮蔽状況(西澤文隆　野帳)

4. 西澤文隆による設計手法

西澤文隆による住宅設計はシリーズ化されていて大屋根の家シリーズ、コートハウスシリーズ、数寄屋シリーズ、立体庭園などがある。大屋根の家シリーズのFig3「室賀邸」は旧館の東南に新館として建てられた住居で敷地が南に下がるため、主屋からの南の景色を妨げないよう緩い勾配の切妻屋根としている。庭を二分する形で公の川が流れている。その上にコンクリートスラブでテラスをつくり、建物と庭を連続させ設計されている。建築と庭をうまく融合させ実測図を感じさせるような図面を書いていた。

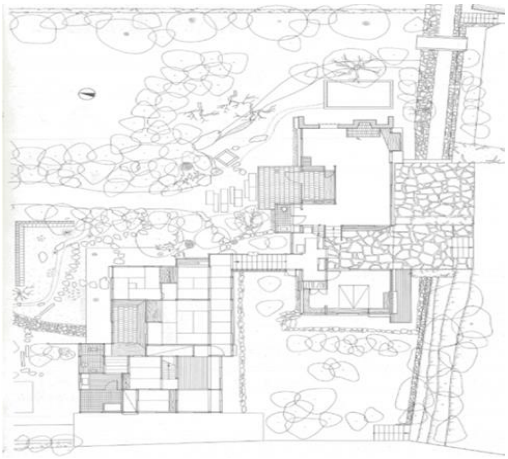

Fig3 室賀邸　平面図　配置図

都市に設計された立体庭園は、敷地の狭さによる密集化と、必然的な高層化が要求され、絶望的な居住条件で、その中で採光、緑を最大限確保することが目標であった。特注品の照明器具製作会社のための事務所、出荷場、倉庫と、三世代にわたる家族構成の住居とのコンプレックスで、空き地を中庭と道路前面部に分けて外部に精一杯の植え込みスペースを設けて、霜が降りるような階段状に配置計画がなされている。どの住宅も図面が密で魅力的である。

5. 結論

当初実測は依頼されたものであったが、今となっては実測活動をしなければ西澤文隆独特の五感で空間認識をし、実測をする第三者ではなくつくる側の気持ちになって空間認識ができなかったのではないかと私は考える。そもそも機械を使わずに磁石やスケールを使い原始的な方法で実測を行う西澤文隆の気力、体力、根性、実測に対する思いは、はかりしれないものだったと感じる。それはFig2「桂離宮　配置図　庭遮蔽状況」の野帳を見てもわかる。具体的に何が書いてあるのかは分かっていないがこのメモには様々なメッセージが隠されているのかもしれない。長い間行われてきた実測調査が設計手法や住宅の設計に生かされてきたのかは住宅の考え方や図面の密度、植物、敷板の表現、庭の使われ方から感じ取れる。

6. 参考文献

・西澤文隆実測図集　刊行委員会：『建築と庭　西澤文隆「実測図」集』建築資料研究社 1997. 6

・西澤文隆・金澤良春：『西澤文隆のディティール　自然と共棲する術』彰明社 1962. 1. 20

・西澤文隆：『西澤文隆の仕事(一)－透ける』『西澤文隆の仕事(二)－すまう』『西澤文隆の仕事(三)－つくる』鹿島出版会 1988. 4. 10

・西一生・澤良雄：「西澤文隆による本願寺黒書院の実測図について-建築家・西澤文隆の実測活動の研究-」

・西一生：「建築制作における人間的行為について-西澤文隆の実測と制作をとおして」

7. 図版出典

・Fig1, Fig2 西澤文隆実測図集　刊行委員会：『建築と庭　西澤文隆「実測図」集』建築資料研究社 1997. 6 p 75. p 76

・Fig3 西澤文隆・金澤良春：『西澤文隆のディティール　自然と共棲する術』彰明社 1962. 1. 20 p 66